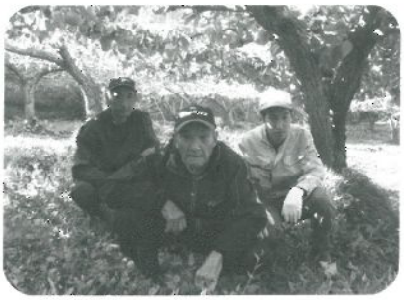
がんばる農業者 あの人この人



松操園（しょうそうえん） 大友弘さん（中央）
大友仁さん（左）　大友肇さん（右）

今回は渡辺町で梨園『松操園（しょうそうえん）』を経営する大友弘さん、仁さん親子をご紹介します。

梨園の開園は昭和33年の夏。初代の操さんと二代目の弘さん冴子さん夫婦、そして親戚数名で15アールの農地を開墾しました。梨園を経営する前、弘さんは稲作の他に冬季に炭焼きもしており、収入は安定していたそうです。当時は、稲作以外にも鶏や豚、乳牛を飼育する農家もおり「農業の前途に明るい兆しが見えていた。」と弘さんは言います。

ところが、次第に輸入品の農産物が市場に増え始め、燃料も炭から化石燃料へと転換が進みました。弘さんはおおいに悩みましたが、農学校時代の恩師や先輩の勧めもあり、梨園の開園に踏み切ったそうです。血のにじむような思いで開墾し、収穫から出荷まで夜なべをしながら作業した苦い思い出は、今でも忘れられないそうです。

昭和34年にはブドウを、そして翌35年には梨（長十郎）を植栽し、その後7年にわたって面積拡大を続けました。三代目の仁さん浩子さん夫婦の就農をきっかけに機械を導入したこともあり、梨園の面積は順調に拡大。現在は弘さん・仁さん夫婦の家族4人と季節雇いの方で、180アールに約10品種の梨を栽培しています。

親子3代にわたって経営している梨園ですが、開園の頃から今も変わらない確固とした3つの信念があると弘さんは言います。

一つ目は『売れる梨の味はお客さんが決める』と考え、常に消費者第一で経営を進めること。新種の植栽にも果敢に挑戦し、多くの人に好まれる品種探しを今でも続けています。

二つ目は、良質な梨を作るには、良質な土を作ること。冬には木の周りにトレンチャーで溝を掘り、稲わら・米糠・魚かすを埋めるそうです。これらが良質の堆肥となって、秋には水々しくほんのり甘い梨ができるのだと言います。

三つ目は、自分達で販売を行う、または卸先の確保を行うこと。手間はかかりますが、市場への流通を止めて信頼のおける卸先を確保し、店頭での消費者の声を聞きながら販売することを選んだそうです。

このように、常に前向きに取り組む弘さん・仁さん親子。4代目にあたる肇さんは、それまで勤めていた会社を辞めていわきへと戻ってきました。昨年から梨園を手伝っており、現在は見習い中とのことです。

親子4代にわたって梨園を守り続ける大友さん家族に、エールを送りたいと思います。

（執筆　遠藤　靖委員）

放射能と農業に関する講演会が開催されました

いわき農林事務所が主催し農業委員会・いわき市などが共催いたしました放射能と農業に関する講演会が、去る平成23年11月27日（日）に、JAいわき市本店会議室において開催されました。

福島第一原発の事故による風評被害もあり農業経営もより厳しさを増しており、農業・農村を取り巻く環境が大きく変化しているなかで、活力ある地域農業を支える担い手を対象として放射線に対する知識を深め、これからのいわき市の農業・農村の振興を図ることを目的として実施されたもので、農業委員を始め認定農業者、農業関係機関・団体等多数の参加がありました。

講演は、（独）農研機構中央農業総合研究センター　木村武　土壌肥料研究領域長が「農研機構が取り組んでいる農地土壌の放射線対策技術について」、東京大学大学院農学生命科学研究科　田野井慶太朗　助教が「放射線と植物について」の内容で行われました。

放射線対策についてでは、土壌の汚染状況によって、農用機械・固化剤を用いた表土除去、水による土壌攪拌・除去、反転耕の技術や今後の取り組みについて説明がありました。

放射線と植物についてでは、放射線の影響により人体内で活性酸素が作られがんのリスクが上昇することや、放射能の可視化技術により植物のどの部分に放射能が残っているか、どの部分から可食部に移行しているかなどの説明がありました。

土壌の放射性物質の除去技術や、安全な農作物を生産するためにはなど、予定時間いっぱいまで活発な質疑応答があり閉会となりました。